

◆◆◆もちつき◆◆◆

■餅つきの思い出にお付き合いください。

昭和40年代。私が園児、そして小学生のころ。
 正月が近づくと親戚の家に集まって餅つきをしていました。
 昔ながらの百姓家。土間が冷たくて冷たくて。凍える手足をさすりながら大人たちが
 バタバタと準備しています。私は部屋の中であちゃんたちと餅の丸め役。
 でも、ばあちゃんみたいにうまく丸めることができません。
 雑煮に入った妙なかたちの餅を、
 「何ねこの餅。一郎が丸めたとやろ？」と笑われていました。

■昭和のおわり、学生時代。

そのころになると家族で餅つきをしていました。家族みな餅が大好き。
 けっこうな量の餅をつきあげていました。あるときのこと。
 父は仕事で弟と私の二人がついて母が丸め役をしていました。
 何回目かの餅をつき終えたときに弟が「ちょっと休憩」と
 家の中に入りました。母は家の中で作業中。目の前にはつきたての餅。
 小腹がすいた私は餅をちぎってテーブルに準備してあったおろし大根につけて
 醤油をたらして食べ始めました。ちょっと味見、のつもりだったのです。
 が、弟が戻ってきたときには餅がすっかりなくなっていました。
 「兄ちゃん、あんた一臼全部食べたと??」その後、いろいろ大変でした…。



■平成のはじめ。教師になってからのこと。

初任校の学校では餅つきがありました。5年生のPTA行事。
 大人がこねてはじめてのうちは子どもたちにつかせます。
 が、子どもの力ではなかなか餅になりません。
 途中から大人がつき始めます。廣渡先生も張り切ります。
 「先生、疲れたろ？代わろうか？」お父さんたちの言葉に、
 「全然疲れてないです！」と、空気を読めずつき続ける廣渡先生。
 「やっば空手しようだけあって力が強いね。音が違うもん」
 そんな保護者の声にすっかり調子に乗った廣渡先生。
 全力でつき続けていたらなんと石臼をたたき割ってしまいました。
 「力のあり余るとるねえ。だれか、はよ先生に嫁さん見つけてやらな」
 そんな保護者の声で皆大笑い（苦笑い）。でも今考えると笑い事ではありませんね…。

